

ぶしょうかんじょうき

#13 武将感状記

作者：熊沢淡庵（くまざわ・たんあん 1629-1691）

刊行：正徳6年（1716）

📖 解題

■ 内容

戦国時代から江戸時代初期までの武将に関する逸話を集めたもの。大名から無名の武士まで様々な話が収められている。全10巻、250話からなる。角書き、内題ともに「近代正説玉碎話」とされており、序題、序文には「玉碎話」とある。同じく



[210. 13/2]

武士の逸話を集録した『志士清談』（南条正修著）の近藤守重（幕臣 重蔵の名で北方探検家として知られる）による序によると、備前藩の吉田源之丞家に伝えられていたものを熊沢淡庵が整理し刊行したものが『武将感状記』であり、その残りをまとめたのが『志士清談』であるという。

上杉謙信が武田信玄に塩を送った話、石田三成と秀吉との出会いの際の三杯の茶の話などよく知られた話も含まれている。

和田正尹（まさただ 岡山藩主に仕えた儒者）による序文には「戦国の興亡の大略を記すものはあるが、「志士・勇者」の忠節・戦死・義気が残されておらず、それを憂えて淡庵が編集した」「太平の世の将士がこれを読み、義を重んじ命を軽くする心を起こし、緊張感を失わないよう願う」といったことが書かれている。戦が遠いものとなり、武士の官僚化・学問の普及が進む中、「武道」「武士道」を教育する理念化が進んだ結果、このような資料が刊行されたと井上泰至は述べている（『江戸文学を選び直す』）。

享保6年（1721）、享保9年（1724）、文政8年（1825）、元治元年（1864）

などの諸版が確認でき、広く一般に流布したと思われる。当館所蔵本には刊年の記載はないが、発行者としては江戸日本橋須原屋茂兵衛、大阪秋田屋太右衛門、備前片上屋、備中太田屋など12の書肆の名が記載されている。

■ 作者

作者は熊沢淡庵。名は正興、通称権八郎、猪太夫。碎玉軒とも号した。寛永6年（1629）平戸に生まれ、はじめ平戸藩に仕えるが、若くして浪人し、三百石で備前岡山藩に仕えた。元禄3年（1690）南條氏と姓を改め翌年江戸で没した。墓所は浅草本智院。儒者。熊沢蕃山の妹の夫であり、和歌を中院通茂（なかのいん・みちもり）、飛鳥井雅章に学び、連歌、俳諧をよくした。『武将感状記』のほかに、『淡庵俳句集』『応兵記』などの著がある。

📖 本文を読む

<翻刻>

『武将感状記』（『続帝國文庫』第31編 江見水蔭校訂 博文館 1911）

[918/8/31] ※序文は収められていない

『武将感状記』熊沢正興編 人物往來社 1967 [281.08/8]

『武将感状記』（『武士道全書』第8巻 佐伯有義ほか編 国書刊行会 1998）

[156/113/8] ※17話抄録（時代社 昭和18年刊の複製）

<現代語訳>

『武将感状記』真鍋元之訳 金園社 1972 ※当館未所蔵

📖 参考文献

植木直一郎「解説」（『武士道全書』第8巻 佐伯有義ほか編 国書刊行会 1998）[156/113/8]

鈴木孝庸「武将感状記」（『戦国軍記事典 天下統一篇』古典遺産の会編 和泉書院 2011）[913.43/171/2]

井上泰至「戦国武将伝のベストセラー 熊沢淡庵『武将感状記』（『江戸文学を選び直す』井上泰至、田中康二編 笠間書院 2014）

※当館未所蔵 翻刻・現代語訳を4話収録